



パステル画の巨匠

佐々木 精治郎

一八八五年（明治十八年）、当時の江刺郡黒石村（現在は奥州市水沢区黒石町）に七人兄弟の次男として生まれた。古くからの裕福な農家である佐々木家で、精治郎は恵まれた少年時代を送った。黒石村博文小学校に入学し、前沢高等小学校に進んだ。一九〇二年（明治三十五年）水沢の農業補習学校、さらに県立盛岡農学校に進み、一九〇五年（明治三十八年）に同校を卒業する。二年生の時、後に妻になる石子と出会っている。

一九〇五年（明治三十八年）二十歳の時、黒石に帰り黒石農業補習学校の雇いとなるとともに黒石村の小学校の代用教員として働いた。しかし、この年の十二月機械化農業を学ぶことを目的に、三百円の資金を持って、アメリカのカリフォルニアに渡った。そこで、小規模な農園を経営する。明治の世に岩手の農村からアメリカに渡ることは、今とは全く違う決心が必要であったと思われる。

一九〇九年（明治四十二年）二十四歳の時、借金を抱え事業に失

敗した。次の年、アメリカのロサンゼルス美術学校に入学する。勉強家で努力家、きちょうめんな精治郎はめきめき上達、十一月に入学し、翌月十二月には三年生になる。白人家庭の住み込みのアルバイトなどで学資を稼ぎ、同校を卒業するときには首席となり特待生となった。パリ留学を命ぜられるが第一次世界大戦勃発で中止になってしまった。ロサンゼルスでは、定期的に合同美術展が開かれていて、精治郎も参加した。三十歳の時、個展を開催している。

この後ニューヨークに移り、一九一六年（大正五年）にニューヨークナショナルアカデミーに入学した。ロサンゼルス美術学校から推薦されたものと思われる。「ナショナルアカデミー絵画クラスホールガーデン賞基金授与賞」と、第三位の成績で十五ドルの賞金を授与された。そして三年後に卒業した。その後、兄にあてた手紙から、店を経営し、帰国旅費を稼いでいたと考えられる。

一九一九年（大正八年）、三四歳の時、十五年ぶりにアメリカから帰国した。そして、石子と結婚した。黒石の実家で新婚生活を送った。農業研究を目的に出国しながら、帰国するときは画家になっていたという経歴の持ち主になり、芸術への情熱は人一倍強く、とくにパステル画の分野で高い評価を受けた。

岩手の美術界について彼の出現は突然といえるものであった。そ

の頃、岩手では、東京美術学校（現在の東京芸大）の学生らが地元
の中学生をリードして発足させた美術団体「七光社」が中心的役割
を果たしていた。精治郎もこの団体に加わり、パステル画を得意と
したことなど会員に強烈な印象を与えた。七光社主催で第一回帰国
個展を開いた。

一九二〇年（大正九年）から、大正末にかけて、岩手県内を旅行
しスケッチして歩いている。水沢区の正法寺や藤橋、江刺の種山を
はじめ景勝岩手のすばらしさを世に紹介している。主として、黒
石在住の人を中心に肖像画を制作した。また、岩手日報紙上にスケッ
チを載せるなど、発表に力を注いだ。

一九二五年（大正十四年）には、中国を写生旅行した。また、前
沢町出身の九州大学医学部小野寺直助教授の支援を受け九州のス
ケッチ旅行に出掛け、個展を開催した。

一九二七年（昭和二年）、地元画壇での活動を中止し、佐々木精
治郎はヨーロッパに渡った。第一次大戦勃発で果たせなかったパリ
留学の夢を果たしたのである。これを援助していたのが、水沢出身
の郷古潔でした。精治郎はパリを本拠地にモデルを使い本格的に裸
婦の勉強を重ねていた。パリでの活動は他にも、ルーブル美術館な
どの模写やセーヌ川での写生など精力的に行った。また、現地の公

募展にも出品していた。サロン・ド・トンス、サロン・ド・フラン
などの海外の公募展に入賞した。一九二九年（昭和四年）五月、友
人の洋画家向井潤吉とスペインを旅行した。また、この年の九月
パリを去りイギリス・オランダ・ベルギーの美術館をめぐり歩いた。
一九三〇年（昭和五年）、帰国すると、家族と東京杉並に移り、
早速、東京日本橋の三越で個展を開き好評を得て、中央での順調な
歩みを続けた。一九三三年（昭和八年）四八歳の時、北斗会展、パ
ステル画展を開いた。

東京在住の岩手県出身芸術家が結成した「北斗会」、地元「七
光社」「素颜社」が岩手美術連盟に統合された。精治郎は、この連
盟結成に力を尽くした。一九四三年（昭和十八年）、七月から八月
まで同連盟から、従軍画家として中国に派遣され、郷土部隊戦績
記録画を作成した。翌昭和十九年三月には、戦争美術展に戦争記録
画「黎明戦」を出品した。

「パステルは、他の種類の材料では、どうしても表現し得ない軟ら
かい味を出すことができ、とくに人物画に適すると思う」と精治郎
は語っている。また、「パステルは、丁寧に色を塗り重ね、燐光発
するような独特の色彩と軟らかな質感を描き出す古典的とも言える
正統派、高度な技術を持って精緻描写の中にも冷たいリアリズムで

はない温かみが感じられる」と、精治郎は述べている。国内では、岩手画壇や中央画壇で活躍しながら一切の公募展への出展をせず、自分の生き方に従ってひたすら人物の肖像画や花・果物などを描いてきた。

終戦を境に精治郎の絵画活動は衰退していた。戦後の混乱期の中、画家として生計を立てることは困難で、サラリーマンや美術の講師をしていた。以後、画壇に復帰することなく晩年を送り、一九七一年（昭和四十六年）世田谷区豪徳寺の自宅で、八六歳の生涯を閉じた。



パステル

*参考文献

小画集『佐々木精治郎』

佐々木精治郎画伯に光をあてる会

『パステル画の巨匠・佐々木精治郎』―石子とあゆんだ人生―

水沢市教育委員会

水沢市武家住宅資料館

『二十世紀の記憶 忘れ得ぬ人々』

胆江日日新聞社



「正法寺」